

離島の観光と女性

— 鳥羽市答志島「島の旅社推進協議会」の事例から —

Tourism and Women on a Remote Islands

土 屋 久*

Hisashi TUTIYA

はじめに

本稿は、三重県鳥羽市答志島に、2004年に設立された「島の旅社推進協議会」の活動を事例として、離島観光と女性の働き方を考えることを課題とする。

「島の旅社推進協議会」の詳細については後述するが、この組織は、答志島島内の任意団体であり、島の着地型観光をリードしている。設立から現在10年が経過し、それまでの数々の活動は、外部からも評価され、2010年にはサントリー文化財団地域文化賞、2014年には過疎地域自立活性化優良事例表彰総務大臣賞をそれぞれ受賞している。その組織の中心メンバーは女性で、俗に「かあちゃん」と呼ばれる島の漁師の主婦層が主体となっており、女性の力が発揮されることにより成り立つ組織である。

本稿では、今後の研究への足がかりとして、主として2015年11月におこなった予備調査の一部を報告する。また同時に、一つの問題提起として、「島の旅社推進協議会」の女性の働き方の原型を、島の女性の伝統的な労働である海女漁にみようとした。

1 調査地の概要

答志島は周囲26.3km、面積6.98km²の伊勢湾最大の有人島である。公益財団法人日本離島センターがまとめた2013年度の『離島統計年報』では、住民登録人口2,578人、世帯数769世帯となっている。島内は、桃取、和具、答志の3集落からなり、本土側の鳥羽佐田浜港から鳥羽市市営の定期船で、桃取港まで約10分、和具港まで約20分、答志港まで約35分である。

島の主な生業は漁業で、同上の年報によると、就業者総数1,209人の内、漁業従事者が521人を数え、二番目に多い飲食店・宿泊業の122人を大きく上回っている。2011年度の答志島の水産業生産額は、2,706.4（百円）であり、この数字は日本に420島程ある有人離島の中で17位となっている。また、答志港の属人水揚量は13位、属人水揚金額は15位で、離島の中でも漁業

* つちや ひさし 順天堂大学保健看護学部

の盛んな島であると言える（数字は同上の年報による）。鳥羽磯辺漁業協同組合のホームページ（<http://www.osakanaikiiki.com>：2016.1.29）に載せられた資料を見ると、島には集落ごとに同漁協の支所がおかれ、それぞれの組合員数と主な漁業は以下のように記されている。桃取支所 213 人（正組合員 68 人、準組合員 145 人）、一本釣り・刺網・底曳き網・黒のり養殖・牡蠣養殖・わかめ養殖・魚類養殖、和具浦支所 109 人（正組合員 64 人、準組合員 45 人）、一本釣り・刺網・海女・黒のり養殖・わかめ養殖、答志支所 247 人（正組合員 135 人、準組合員 112 人）、一本釣り・刺網・船曳網・バッチ網・底曳き網・海女・黒のり養殖・すくい網・たこつぼ漁。また、同資料では、答志地区には若い漁師が多く、唯一「寝屋子」⁽¹⁾の制度が残るとされる。

次に、観光に関する統計データと、島の行事・民俗慣行についてまとめておく。

先の『離島統計年報』では、2011 年度の最盛期の宿泊能力として、19 件の旅館・ホテルで収容能力 950 人、6 件の民宿で 138 人としている。また、同統計では、2011 年 3 月から 2012 年 2 月までの宿泊者数は 117.9（千人）、2011 年の観光客数は 147.3（千人）で、後者の数字は有人離島の中でも 18 番目に位置するという。

答志島には、観光資源となる行事や民俗慣行等も多い。鳥羽市観光課が発行する『鳥羽の島遺産 100 選』には、答志島の祭りとして、旧暦の 1 月におこなわれる答志・和具集落の八幡祭（弓祭り）、2 月におこなわれる桃取集落の弓引き神事、7 月の豊漁祭が紹介されている。八幡祭では、神事で使われた消炭と布海苔で練り上げた墨を用いて、各家の戸口や船に㊦印を描いて、大漁や家内安全を祈るという〔鳥羽市観光課 2014：94-97〕。実際、島内の小径を歩いてみると、至る所に㊦印を見ることができる。また、先に触れた「寝屋子」の民俗慣行は、かつては日本各地にみられたようであるが、高度経済成長期に急速に廃れ、現在では、答志島の答志集落のみに残っているという〔村本・遠藤 2014：213〕。この貴重な慣行は、海女文化とともに観光資源として活用されてもいる。

2 「島の旅社推進協議会」の活動と実績

2-1 設立の目的と活動内容

「島の旅社推進協議会」は、答志島島内の 3 町内会（桃取・和具・答志）、答志島旅館組合、鳥羽磯辺漁業協同組合の 3 支所（桃取・和具・答志）、そして各町内会の老人会・婦人会からなる島内の有志団体である。はじめにでも触れたが、2004 年に設立され、10 年超の活動実績を有し、島内に在住する 5 名の女性メンバーを中心に、現在もその活動を広げている（活動内容に関しては後述）⁽²⁾。

「島の旅社推進協議会」のパンフレット（「ミニミニ島旅うらら」）には、「ようこそ島へ」と題され、会の目的・活動方針が以下のように記されている。

島は海に囲まれた漁村ならではの生活や味に溢れています。

そして細い路地を歩くとそこに暮らす島人の知恵や工夫を垣間見ることができます。そんなありのままの島の姿を、お越しいただいた方におすそわけしたい！という思いから島の旅社は出発しました。私たちがあちゃん（中心となる女性メンバーのことー土屋）やここに住む人々が島をプロデュースする、島全体で島を元気にすることを考えるのが島の旅社のおもてなしです。

上記引用文中に見られる通り、「かあちゃん」や「ここに住む人々」が観光を立案しており、着地型観光をおこなう組織であることがわかる。また同時に、「島を元気にする」、つまり、観光を通じた地域おこし、ということを活動方針としていることが理解される〔山本 2013：30-31〕。

活動内容は、主に以下の4本のメニューからなるという。

- ① 浮島自然博物館：博物館といっても、建物等はなく、桃取港前にある周囲3kmの無人島である浮島を利用して、海の生き物の観察等をおこなうメニュー。
- ② 路地裏つまみ食いツアー：漁村の細い路地裏を、島の風習などを説明しながら案内するメニュー。
- ③ 海女小屋体験ツアー：海女たちが体を暖めるための海女小屋を観光用にアレンジし、そこで地元の魚介類を堪能するメニュー。
- ④ 小・中学生の体験学習：干し物作りや釣り、漁具の扱い方等を地元の漁師や海女から習い、子ども達の「生きる力」につなげるメニュー。⁽³⁾

2014年度の実績を挙げておくと、①には153人が参加、②と③は計73回実施、計563人が参加、④は13回実施、621人が参加、となっており、その他、5団体、計44人の視察の受け入れ、全国過疎シンポジウム等各種の会合への参加等が、当該組織の2015年度視察資料に記されている。

2-2 スタッフの働き方

「島の旅社協議会」には専従スタッフはおらず、現在先に述べた5名の女性スタッフが中心となり、会の運営をおこなっている。そして、請け負ったメニューにより、島内の漁師や海女、各種団体の協力を得て事業を遂行する形態である。5名の内訳は、島外から婚姻により答志島に移住した者3名、答志島出身の者2名であるが、すべて既婚者であり、夫や実家の仕事（漁師やワカメ養殖）の手伝い、海女漁をおこなう者がほとんどで、基本的に各自の空いている時間をお互いに調整しあい会の仕事をおこなっている。従って、給与は固定制ではなく時給制である。収入的には、会の活動収入だけではとても生活できず、夫や他の仕事からの収入があるから活動をおこなうことができるとのことである。

一例として、路地裏つまみ食いツアー、海女小屋体験ツアーがおこなわれる際のスタッフの平均的な一日のスケジュールを以下にまとめておく。

- 9：00 事務所に入る
- 10：00 ツアー客を港に迎えに行く
ガイド・接待
- 14：00 ツアー客を見送る
- 15：00～16：00 事務所に戻り、片付け・報告書の作成

スタッフの内、多い者は、こうしたツアーに一月4、5回従事するといい、5人のスタッフではかなりの負担を強いられるが、情熱と島への愛情が活動を支えているという。

3 女性の伝統的な働き方—海女—

次に答志島の伝統的な女性の働き方についてみてみたい。

鳥羽市の海の博物館館長の石原義剛は、答志島の中でも特に、答志集落では女性も男性とともに働くという習慣があり、冬のエビ刺し網、たこつぼ漁にも女性が出ており、また、近年ではバッチ網漁にも女性が乗り込んで働いている。島外からの嫁いだ女性も同様であり、周囲の女性が働いているので、家に一人閉じこもっている訳にはいかなくなると指摘する〔石原 2012：85〕。石原は、こうした習慣の起源は海女漁にあるのかもしれない〔同 86〕としているのだが、筆者の海女からの聞き取り調査の中でも、答志島では、女性が男性とともに働くという習慣があること、また、海女がいたために、そうした習慣が生まれたのではないかと考える意見が確認された。確かに、海女が存在が、女性も男性とともに働くという習慣を生み出した一つの要因と考えられるのだが、ここではその可能性の示唆に止めておく。

海女⁽⁴⁾と答志島の女性の働き方との関係についてもう一点指摘をおこなっておきたい。

それは、海女の育成過程に関わることであるが、先ずは、N（55歳）、H（52歳）、2人の海女が話した、子どもの頃の思い出に端を発する会話を以下に資料としてあげる（資料は、文の読み易さを考慮し、文意が変わらない範囲で主語や目的語を補う等の加工を施した）。

H：遊び場が海だったから、海に出て行くのが苦にならない。

N：たこ壺のかけらを海に投げ込み、それを取り合う、「あかべん」という遊びがあり、それが海女の練習になっていた。そうした遊びの延長で、磯物を採ってそれを売りにいくと、百円とかもらえる。百円は子どもにとって大金。それが嬉しかった。

H：獲ってきたつぼ焼きを焼いていると、観光客が欲しいというから、それを売って、カップエビセンやアイスクリームを買うのが私たちのステータスでした。私がアワビを始めて獲ったのが小学生5年生頃。何で覚えているかというと、親がもの凄く喜んでくれた。テストで百点取ってもそんなに喜んでくれなかったのに、そのときに芽生えたのは、獲物を獲ったら喜ぶんやなど。

N：私のところは、今娘が18歳なんですけど、4年生の時、始めてアワビを獲ってきた。飛び上がるくらい嬉しくて、結局それを2,000円で買って上げましたよ。本当は1,000円相当でしたが。

H：たぶん、その小学校4年生の娘さんは、感動したと思います。誰かに、獲ってこいと言われる訳でなしに、自分の力で獲物を獲ってお金にかえるということは、大事なことね。

ここでは、自分の力と技術で、自分たちの生活環境を見事に利用しお金を得たこと、そして周囲の大人から承認されたことの感動と喜びが、子どもの目線に戻って鮮やかに語られている。また、親の立場からの感動・喜びも同時に語られている。こうした体験の世代を越えた共有が、答志島の女性に、周囲の環境を利用し、自分の力・技でお金を稼ぐ術や、そのことを大切とする観念を身につけさせたと考えられる。そして、このことが、男性とともに女性も働くという答志島の慣習と相俟って、「島の旅社推進委員会」の女性の活躍に繋がるのではないかと問題提起をおこなっておきたい。

まとめ

「島の旅社推進協議会」は現在新たな局面を迎えている。10年間の活動実績を通じて得た信頼と期待は、当該組織のメニュー参加者を増加させ、専従者がいないという会のあり方では、来島者や各種のイベントを捌ききれなくなってきたのである。そのための解決策として、地域振興協力隊の募集もおこなっており、隊員を専従者として置くことの成果が期待されるところである。

さて、本稿では、「島の旅社推進協議会」を事例とした、離島観光に携わる女性の働き方の予備調査の報告と、その働き方の原型を海女にみることの提案をおこなった。

今後、観光や地域おこしの現場で、女性の活躍が一層期待されることであろう。そうした中、「島の旅社推進協議会」の活動は、その活躍の成功事例と考えられる。当該組織のあり様をさまざまな側面から考察する作業は実り豊かな成果をわれわれにもたらすと思われる。本稿を足がかりに、今後研究を深化させていきたいと考える。

註

- (1) [村本・遠藤 2014: 213] には、次のように説明されている。

「寝屋慣行とは、地域共同体における一種の疑似家族のしくみを意味し、その発祥は江戸時代とも言われる。この地区の長男たちは、中学校を卒業すると数名単位でグループを組んで『寝屋子』となり、原則として26歳になるまでの毎夜、実の両親とは別に定めた『寝屋親』の家を訪れて寝泊まりする。26歳の正月をもって寄宿生活が解消された後も、寝屋子と寝屋親、寝屋子同士の間には緊密な相互扶助関係が築かれ、一生涯にわたって継続する」。

- (2) 紙数の都合もあり、ごく簡単に「島の旅社協議会」の年譜をまとめると以下のようなになる。

2004年6月、島の旅社推進協議会設立、浮島自然水族館、路地裏体験ツアー、海女小屋体験ツアー、ウェルネスの旅*、小中学生の体験学習等のメニュー開始

2007年 神島ふれあい体験のメニュー* 開始

2008年 子ども農山漁村交流プロジェクト* のメニュー開始

2010年 サントリー文化財団地域文化賞受賞

2014年 過疎地域自立活性化優良事例表彰総務大臣賞受賞

*このメニューは、「歩く・食べる・感動する」健康ツアー企画。島内を程よく歩き、カロリー計算された地元の食材を堪能するメニュー。

*「島の旅社協議会」は、答志島だけでなく、伊勢湾に浮かぶ神島・菅島・坂手島にも体験メニューを展開する工夫をしているが、これは、神島でおこなうプログラムである。

*答志は、農林水産省・文部科学省・総務省がおこなう、子ども農産漁村交流プロジェクトの受け入れ地域となっており、この事業にも当該組織は関わっている。

上記の他にも、現在、鳥羽市から2013、14、15年と「離島の魅力創出事業」を委託されるなど、行政との連携も強化されつつある。

- (3) 具体的な体験メニューには、主に以下があるという。

【漁業体験】

釣り（堤防）、市場見学、干物作り、ロープ教室、海女小屋見学、漁師・海女の話、魚の掴み取り、チリメンのモンスター

【クラフト体験】

シェルキャンドル作り、ほら貝磨き、貝殻花びんづくり、貝紫染め

【自然体験】

無人島磯観察（浮島）、貝殻拾い、海水浴

【島の暮らし】

路地裏スタンプラリー、島内ウォーキング、ゴミ拾い（環境学習）、寝屋子制度

【食事体験】

海女小屋食事体験、海の幸お料理、島のおやつ作り

- (4) 答志島の海女の人数は、1949年に1000人であったのが、高度経済成長が終った1978年には300人へと激減している〔石原 2012：86〕。海女文化国際発信事業実行委員会が作成した「志摩半島の海女」と題されたパンフレットでは、2014年現在、日本列島の18県に約2000人の海女がおり、志摩半島（鳥羽市・志摩市）に761人で、高齢化が進み平均年齢は65歳を越えているという。その内、答志島は、桃取に1人、答志に79人、和具浦に50人となっている。

引用・参考文献

- 石原義剛 2012「答志島―伝統を生きながら新しくなる島―」『人間環境論集』第12巻第1号 法政大学人間環境学会
- 公益財団法人 日本離島センター 2013『離島統計年報』
- 鳥羽市観光課 2014『鳥羽の島遺産100選』伊勢文化舎
- 鳥羽市史編さん室編 1991『鳥羽市史』
- 村本由紀子・遠藤由美 2015「答志島寝屋慣行の維持と変容：社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー」『社会心理学研究』第30巻第3号 日本社会心理学会
- 山本加奈子 2013「漁家女性が立ち上げた島の旅社―離島の日常を島民自らお裾分け」『アクアネット』第16巻第3号 湊文社